

病棟保育士の役割

—病棟保育士へのインタビュー調査から—

Interviews with Hospital Play Specialists on Their Roles in Caring Children

赤池美紀, 遠藤清香

Miki AKAIKE, Sayaka ENDO

概要

病気のため入院生活を送る子どもたちの院内での生活の質を向上させるため、病棟保育士の導入が進められている。本研究では、病院現場で働く病棟保育士にインタビュー調査を行い、病棟保育士の目から見た病棟保育士の役割、利点や課題について考察した。

子どもの病院での生活をよりよいものにするための病棟保育士の役割について、現場の病棟保育士は、(1)遊びを通じた支援、(2)環境設定、(3)保護者・きょうだい支援、(4)スタッフとの連携、の4つを挙げた。また、病棟保育士の利点については、子どもや家族にとって安心材料になるということを挙げた。病棟保育士の課題については、現場で保育士自身が直面している課題として(1)個に応じた対応をする技術、(2)病気の知識、(3)パソコンスキル、(4)スタッフ間の連携の4つが挙げられた。特にスタッフ間の連携については、異業種である看護師・医師と関わる際に、考えをうまく伝えるためのコミュニケーション力を身につけることが大切であることが指摘された。

本研究でのインタビュー調査を通し、いずれの病院でも病棟保育士が活躍し子どもの入院生活の質の向上に役立っていることが感じられたが、主として人件費の問題から病棟保育士が配置されていない病院も数多くある。医療との連携や病院運営の視点からも病棟保育士の役割と子どもの入院環境の質の向上について考えていく必要があるだろう。

I 研究の目的

子どもの中には、病気のために入院を余儀なくされ、家族から離れて見知らぬ人の中で過ごさなければならない子どもたちがいる。しかし、入院している子どもたちにとっては家族との生活や友だちとの関わりが制限されてしまい、その心理的不安やストレスは非常に大きい¹⁾。様々な制約がある入院生活が続き、病気を治しても、心の元気をなくしてしまうこともある。そんな子どもたちの入院による心理的不安や学習の不安について

は、個別の対応が必要とされるが、現状では、全ての子どもの入院時に個別の対応が保障されるにはいたっていない²⁾。

入院児を取り巻く環境をよりよいものにするため、近年では小児病棟に病棟保育士を配置する病院が増えてきている。病棟保育士とは、病院に勤務し、入院している子どもと関わる保育士のことである。1991年の時点で、全国の97大学病院、22小児総合医療施設のうち、病棟保育士が導入されているのは、大学小児病棟の24%、小児総合医療施設の27%であった³⁾。その後、1997年には、現

在の日本医療保育学会が発足し、日本医療保育学会による学会認定資格として、2007年より医療保育専門士が誕生している⁴⁾。

病棟保育士の役割には、子どもの生活並びに発達援助、環境構成、母親的役割、心理的サポート、病気の克服あるいは意欲の向上などがあると言われている。また保育職の導入効果として、遊びによるフラストレーションの解消、不安、抑鬱等の軽減や緩和、生活指導が認められており⁵⁾、医療や看護スタッフとともに病気の子どもの支える病棟保育士の役割が非常に重要であるとされている⁶⁾。

2000年には厚生労働省が「すこやか親子21」において病棟保育士の必要性を指摘し⁷⁾、2002年には小児入院管理料として、病棟保育士を設置すると診療報酬が加算されるようになった。診療報酬加算の条件として、①小児入院患者を対象とする病棟保育士が1名以上勤務していること、②30㎡以上のプレイルームがあること、③プレイルーム内には入院中の小児の成長発達に合わせた遊具・玩具・書籍があること、の項目が挙げられ、基準を満たせば、患者1名につき1日1000円の加算が取れることとなった。これをきっかけに、病棟保育士を採用する病院は急増することとなった。2006年の調査では、病棟保育士がいる病院は300

施設に増えたと指摘されている⁸⁾。

病棟保育士がいない施設でもその必要性が訴えられてきたが、主として経費の理由から導入していない病院も多い⁹⁾。病棟に配置される病棟保育士の人数も十分でないとする報告もある¹⁰⁾。また、病院側が病棟保育士の役割を理解していないために、シーツの交換や食事の配膳、病室の清掃など本来の目的とは別の仕事も任されていたり、子どもと遊ぶ時間がない病棟保育士がいたりする現状もあり、病棟保育士が子どもと関わる環境の改善が課題となっている¹¹⁾。

先行研究より、入院児のケアに関する病棟保育士の重要性が明らかになる一方、配置が進まない現状・課題も示されている。実際に病院現場で働く病棟保育士は、このような現状をどのように捉えているのだろうか。本研究では、病院現場で働く病棟保育士の目から見た病棟保育士の役割、利点や課題について探っていく。特に役割については、子どもの生活をよりよくするためにどんな工夫をしているかを重点として考察する。

Ⅱ 研究の方法

本研究では、病棟保育士へのインタビューを行った。

(1) 参加者

表1 インタビューにおける質問項目

インタビュー項目
1. 子どもたちとの関わりの中で、子どもの不安を軽減するために実践し、工夫している言葉掛けがあれば教えて下さい。
2. 集団での関わりや個々での関わりにおいて、配慮していることなどはありますか。
3. 治療以外での子どもとの過ごし方を教えてください。(プレイルーム以外での活動も)
4. 子どもとの関わりを通して、様子や態度で変わったことなどがあれば教えてください。(例えば、入院当初と比べると情緒が安定してきた、生活態度の変化がみられた、子ども同士での関わりが増えた、治療への取り組む姿勢が変わったなど)
5. 病棟保育士の存在は、入院している子どもや家族にとって、どんな影響を与えていると感じているかを教えてください。
6. 病棟保育を行ってみようと思ったきっかけを教えてください。また、病棟保育を行う以前と現在における病棟保育に対するイメージを教えてください。
7. 子どもたちと関わっていく中で、困難に思ったことや不安に感じたことなどがあれば教えてください。またそのような場面に立ち向かったとき、どのような対処を行っていますか。
8. 病棟で子どもと関わる上で大切なことや心掛けていることなどがあれば教えてください。
9. 病棟保育士にはどのような役割が求められていると考えますか。また医療機関に病棟保育士を導入した利点や欠点はどのようなことだとお考えですか。
10. プレイルームの設置についての利点や欠点は何かとお考えですか。
11. 今後の医療現場において、病棟保育士に求められることは何かと思いませんか。

病棟で働く病棟保育士8名にインタビューに参加してもらった。それぞれ病棟保育士A~Hとする。病棟保育士A・B・C・DはX病院に勤務、病棟保育士E・FはY病院に勤務、病棟保育士G・HはZ病院に勤務する病棟保育士である。

(2) インタビュー調査の方法

研究に参加した病棟保育士に、筆者がインタビューを行った。それぞれの所要時間は約30分から1時間程度であった。実施時期は、2014年5月~2014年8月、各病院で1日ずつであった。質問項目は、表1のとおりである。各病院に質問項目を事前に伝え、それに関わる内容を自由に回答してもらった。なおこのインタビュー項目は、保護者を対象に病院内保育のニーズを調査した先行研究¹²⁾や、病棟保育士の有用性について看護師と患者家族へアンケート調査と聞き取り調査を行った先行研究¹³⁾をもとに作成した。

(3) 倫理的配慮

本研究に参加した病棟保育士には、研究の目的および方法について説明し、得られたデータの管理には十分留意することで同意を得た。

Ⅲ 調査結果と考察

インタビューの回答について、質問項目ごとに表2から表12にまとめる。回答の中で、入院中の子どもの生活をよりよくするための工夫と思われる部分には、下線をひいた。また病棟保育士の利点・課題にかかわる部分には、波線をつけた。なおZ病院で行った病棟保育士G・Hへのインタビューでは、すべての項目への回答を得ることができなかった。そのため、インタビュー回答は、X病院・Y病院の病棟保育士から得たものを中心にまとめる。

質問項目1「子どもたちとの関わりの中で、子どもの不安を軽減するために実践し、工夫している言葉掛けがあれば教えてください」に対する回答を表2に示した。入院中の子どもは、家族から離れ、不安な気持ちに陥ることが多い。そのため病棟保育士は、子どもに対して、保護者との間をつなぐ関わりを多くすることで、子どもの不安を軽減している様子が伺えた(表2下線部①②③)。また、看護師のフォローを通して子どもの不安を軽減する(下線部④)、キワニスドール¹⁴⁾を使っ

表2 質問項目1「子どもたちとの関わりの中で、子どもの不安を軽減するために実践し、工夫している言葉掛けがあれば教えてください」に対する回答

病院	回答
X病院	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>目線を下げて子どもと関われるよう心掛け、子どもの気持ちを代弁して受容することで、保育園や幼稚園と同じように、子どもに安心できる場所を提供することができる。</u> ・<u>子どもと普通に関わる中で、子ども自身がどうしてほしいか待つタイミングが重要であり、子どもが声掛けしてほしいときに声掛けができるように配慮する。</u> ・<u>子どもの性格や気分に合わせて関わりを行い、泣きたいときにはおもいきり泣かせておくなど、子ども自身で立ち直るきっかけがとれるように関わる。</u> ・<u>距離感が保てるように子どもと近付き過ぎないことなど、自然な関わりの中での工夫がとても大切である。</u> ・<u>入院してすぐ、母親と離れることでの母親においていかれた不安や寂しさを軽減するために、母親の行動や様子をまめに子どもへ伝える(①)。子どもに伝わるか伝わらないか分からないが、母親は<u>おいていく訳がないと伝える(②)。</u></u> ・<u>おもしろいことを言って笑わせるなど、寂しい気持ちの気分転換ができるよう、ユーモアのある言葉掛けを行うことも大切である。</u> ・<u>病棟保育士が積極的に楽しく母親と話す姿を子どもに見せる(③)ことで、子どもが自然と病棟保育士に心を開き、子どもと信頼関係がもてるきっかけになる。</u>
Y病院	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>治療を一生懸命耐えて頑張っている子どもたちが少しでも楽しいと感じられる関わりを行っている。</u> ・<u>子どもと関わる中で、看護師のフォロー(④)を行っている。</u>
Z病院	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>遊びの中で、キワニスドールを使ったプレパレーション(⑤)を行い、これから行う治療を実演していく。</u>

たプレパレーション（下線部⑤）を行うなど、病院という環境ならではの工夫もあることがわかった。

質問項目2「集団での関わりや個々での関わりにおいて、配慮していることなどありますか」に対する回答を表3に示した。この質問に対する回答からも、保護者支援を通して子ども支援を行っていることがわかった（表3下線部⑦⑧）。また病棟保育士はきょうだい支援も重視しており、きょうだいに対する直接の支援（下線部⑨）をし

たり、きょうだいと入院児をつなぐ役割（下線部⑫）を果たしたりしていることがわかった。また、入院中の子ども同士をつなぐ配慮も多くあることがわかった（下線部⑥⑪⑬⑭）。長い期間をとともに過ごす子どもたちを、年齢が様々であることを生かしながらつなぎ、それぞれの子どものための生活をよりよくするよう工夫している様子が伺えた。また、病棟保育の課題として、保護者支援の難しさ（波線部⑩）や医師・看護師との連携（波線部⑮）についても言及された。

表3 質問項目2「集団での関わりや個々での関わりにおいて、配慮していることなどありますか」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢がバラバラなので難しいが、<u>3歳～6歳くらいまでの年齢の子どもが全員で遊べる遊びを考える</u>（⑥）。マットを広げ、皆でおもちゃを使って遊ぶことなどが例としてあげられる。 ・<u>赤ちゃんは、母親と一緒に参加</u>（⑦）できるようにし、大きい子どもは一人で活動できる遊びや保育を考え、実践していく。 ・母親に積極的に保育に参加してもらうことで、気分転換ができるように配慮する。 ・発達にあったおもちゃの大きさを選択し、使用する。 ・<u>病棟保育士が母親と話し相手になることで、子どもとの距離感を上手く保てるようにする</u>（⑧）。病棟保育士は表情や言葉を読み取る力が必要とされ、親子にあった関わりを重視していく。 ・普段は何も問題がない様子のお姉ちゃんが情緒不安定になっているなど、<u>家族の気持ちも重点に置き、きょうだい支援</u>（⑨）も視野に入れ、取り組めるように配慮を行っている。 ・<u>病棟保育士が保護者に必要とされ、期待されるため、保護者に求められることが多すぎてしまい、<u>応えられない場合も多くある</u></u>（⑩）ので、日々考えながら支援を行っている。 ・誕生日だけでなく、参加できなかった場合は、入園（学）式・卒園（業）式・運動会などの際には、スタッフがうたを歌ったり、カードを渡したりして、<u>行事の際には、お祝い</u>をしている。 ・<u>個室の子どもにはカーテンをあけて保育</u>を行っていくことで、閉鎖的な心理状態から解放され、子どもも母親も気分転換できるような関わりを行う。 ・<u>前日と異なる遊び</u>を行い、遊びの中で色々な経験ができるようにする。 ・<u>子どもと子どもをつなぐ関わり</u>（⑪）をする。年齢が様々な子ども同士での関わり合いの中で、子ども自身が自らの居場所づくりや環境づくりが行えるよう、周りの大人が配慮していく。点滴が苦手な嫌がっていた子どもが、頑張っている姿の友達の姿を見て、拒否せず頑張れるようになったことが例としてあげられる。 ・入院中は会えないきょうだいがお互いを忘れないように交換ノート（⑫）を通して連絡を取り合っている姿もみられた。 ・テーブルや椅子の配置、マットを敷くことで<u>安全に配慮</u>している。 ・乳児には、移動の際にバギーを使用することで、自分の居場所がもてるようにしている。 ・大部屋での保育では、気分や病状に合わせて一人一人の子どもにあった遊びを提供し、一人遊びではなく、<u>全員で遊べる遊びが行えるよう配慮</u>（⑬）する。 ・子どもたちが同部屋同士でお互いに声を掛け合いながら生活できるように、<u>病室の中では病棟保育士が明るい声掛け</u>（⑭）を行っている。 ・<u>病棟保育士は看護と重ならないような関わりを行い、<u>医師や看護師との連携がとても重要</u></u>（⑮）。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレイルームでの異年齢同士の関わりの中で、病棟保育士が強制的に関わっていくのではなく、<u>見守っていく関わりも大切に</u>している。 ・<u>安全面</u>における<u>配慮</u>を重要視している。 ・友達同士の関わりの中で、<u>けんかが起きた場合は、気持ちを受容し代弁</u>することで、自分から謝れるよう促している。

表4 質問項目3「治療以外での子どもとの過ごし方を教えてください。(プレイルーム以外での活動も)」に対する回答

病院	回答
X 病院	・お風呂の介助や治療以外の関わりは、全て病棟保育士が行っている。例として歯磨きや着替えの援助などがあげられる。
Y 病院	・保護者が付き添えない時間において、子どもの面倒をみたり、個室や部屋から出られない子どもへの保育を行ったりしている。

表5 質問項目4「子どもとの関わりを通して、様子や態度で変わったことなどがあれば教えてください。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・薬が飲めないことや吸入が嫌で泣いている子どもが、友達の姿や病棟保育士の言葉掛けで、頑張る(16)姿がみられた。 ・入院前は塗り絵やパズルや絵本が嫌いだった子どもが、TVが見られない環境の中で少しずつ好きになっていく姿がみられた。 ・退院後も規則正しい生活(17)が送れるようになった。 ・退院後も絵本が大好き(18)になり、TVやゲームをしなくなった。 ・甘えん坊だった子どもが、一人時間が増え、母親なしでの生活を行っていくことを通して、自立(19)していく成長がみられた。 ・卒乳できるようになった。 ・子どもと関わっていく中で、病棟保育士は子どもの新しい発見をし、保護者の育児支援に繋がる(20)きっかけづくりになるよう配慮している。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・入院当初は不安な表情を浮かべていた子どもが少しずつ笑顔になっていった。 ・子どもが好きなものや興味をもっているもので積極的に関わり、遊んでいく中で、少しずつ病棟保育士に信頼を抱き、目線を合わせてくれる姿がみられたこと。

質問項目3「治療以外での子どもとの過ごし方を教えてください。(プレイルーム以外での活動も)」に対する回答を表4に示した。回答より、保護者が付き添えないとき、病棟保育士は、生活のほとんど全ての部分で、子どもに関わっていることが分かった。もし病棟保育士の配置がなければ、これらの生活援助を行う人がいない、もしくは医療スタッフが行うことになる、と考えると、改めて、病棟保育士の役割の重要性について考えさせられる。

質問項目4「子どもとの関わりを通して、様子や態度で変わったことなどがあれば教えてください。」に対する回答を表5に示した。この設問に対する回答から気づくことは、病棟保育士が、入院という子どもが保護者とはなれて生活しなければならぬ環境で、子どもの成長・発達を見守る存在だということである。保護者と一緒に居られない逆境の中で子どもは大きく成長する(表5下線部16(17)(18)(19))。そして病棟保育士は、子どもの

そういった成長を保護者に伝え、それが保護者にとっての子育て支援になる。これはは病棟保育士の利点であると考え(波線部20)。

質問項目5「病棟保育士の存在は、入院している子どもや家族にとって、どんな影響を与えていると感じているかを教えてください。」に対する回答を表6に示した。病棟保育士は遊びを通して常に明るく子どもや保護者に関われるよう努めている(表6下線部26(27))。その姿は、子どもが入院生活にも楽しいことがあると感じることにつながる。また、保護者にとっても医療スペシャリストとは違った保育士の関わりが、子どもの入院生活の上での安心につながっていることが伺える(波線部21(22)(23)(24)(25))。

質問項目6「病棟保育を行ってみようと思ったきっかけを教えてください。また、病棟保育を行う以前と現在における病棟保育に対するイメージを教えてください。」に対する回答を表7に示した。病棟保育士を目指したきっかけは様々である

表6 質問項目5「病棟保育士の存在は、入院している子どもや家族にとって、どんな影響を与えていると感じているかを教えてください。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・関わった保護者のほとんどが必要(21)としている。 ・母親にとっては頼れる存在(22)であり、心強い味方であるため、子どもにとっては、母親に近い存在(23)となっている。 ・子どもや保護者にとっての安心材料で、病棟保育士がいることで少しでも笑ってもらう。医療スペシャリストではなく、周りを和らげる存在(24)である。 ・病棟保育士がいることを入院条件として病院を選んだ家族も多いため、土曜日や日曜日でも安心して、子どもを預けることができ(25)、助かっている保護者も多い。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・治療を行っていく辛さや苦しきから解放され、家族だけでなく、病棟保育士も遊んでくれる(26)存在であると子どもたちが思ってくれていたら嬉しい。 ・看護師さんやスタッフも常に笑顔で関わっている(27)ので、病院は辛いことだけでなく、楽しいこともあることを子ども自身が気づいてくれたら良いと思う。

表7 質問項目6「病棟保育を行ってみようと思ったきっかけを教えてください。また、病棟保育を行う以前と現在における病棟保育に対するイメージを教えてください。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の先生をしていたが、医療機関への興味を多くもつようになった。 ・幼少期に入院経験がある。病棟保育士が寂しい気持ちを和らげ、明るい雰囲気の中で関わりをしてくれた。 ・幼少期に入院していた経験から母親に医療病棟保育士の存在をきいていた。また小さい子どもが好きだったことや小学生のときの実体験から、病院は特別な場所であり、生活の中から切り離されていると感じたため医療機関への関心を抱き、医療関係の仕事である病棟保育士を目指した。 ・幼馴染の弟がぜんそくで入院していたことがあり、お見舞いに行く中で病棟保育士の存在を知った。 ・弟が亡くなったことをきっかけに医療機関に興味をもった。 ・プレイルームにおもちゃがいっぱいあり、嬉しい。 ・実際に働いてみて楽しいが、病院の記録は全て電子カルテであるため、全てパソコン入力(26)する。行事の計画は、病院側に発表してから企画するなど連携が多い(27)ことなどが働く前は想像していなかったことである。 ・互いに信頼し合い、理解しあえる看護師との関係作り(28)が大切。 ・長期での闘病生活を行っている子どもに関わり、病室でぐったりしている子どもが多いと思っていた。しかし実際は病室を走り回っている姿があり、驚いた。 ・短期間での保育を行っていく(29)こともあり、見た目は元気な子どもが多いので、保育士ではなくベビーシッターではないのか(30)と思ったこともあった。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児施設で働いていたことがきっかけで、病棟の子どもの面倒を見てみたいと思い、病棟保育士への興味を抱いた。 ・学生の頃、新生児病棟で子どもを見たことがきっかけで、病棟保育士に興味を抱いた。 ・3年間産婦人科で勤め、新生児病棟で4年間勤めていたが、新生児病棟は生まれてから最高で2年間しか子どもの成長を見られず、個々に合った関わりが主であることもあり、普通の病棟での保育を行っていききたいと思い、勤めた。

が、自身や身近な人が病棟保育を受けた経験をしている病棟保育士が多かった。

ここでは、病棟保育士の課題について触れる内容が多かった。課題としてまず連携が挙げられた(表7波線部27,28)。さらにパソコン入力についても、仕事を始めてその重要性に気づいたという

報告もあり(波線部26)、今後、病棟保育士を養成していく場合には留意したいところである。また、病棟保育の対象となる子どもたちは長期入院の子ばかりではない。波線部29,30で指摘されたように、短期で、ベビーシッターのような関わりではないいていねいな保育を病棟保育士自身が自信を

表8 質問項目7「子どもたちと関わっていく中で、困難に思ったことや不安に感じたことなどがあれば教えてください。またそのような場面に立ち向かったとき、どのような対処を行っていますか。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・短期間での入院生活において、子どもとの関係性ができていないため、好きな遊びを行い、病院の人という警戒心を子どもになくしてもらう (31)。 ・遊びを始める前に子どもとの関係性を築いていくことが大切である。 ・楽しいことがすべてではないが、退院する際に笑顔で送り出せることが、病棟保育士としてとても嬉しい。 ・突然けいれんを起こしたり倒れたり吐いたりした姿を目の当たりにした場合に、治療方法を知っていても恐怖や焦りを感じる (32)。 ・医療の知識を多くの経験の中で身につけていく。 ・治療方法や病気を知らない場合は、医師や看護師に積極的に質問 (33) し、カンファレンスへも積極的に関わることで関わり方を学び、知識を習得する。 ・どのように関わっていけばいいかなど気軽に相談できるようにし、発達段階に合わせた心理的な不安や疑問は専門家の心理士に伝える (34)。 ・不安や心配事などは抱えたままにせず、医師や看護師に聞いたり、周りの病棟保育士に相談したりし、困難を乗り越えていくことが大切 (35) である。 ・医師の要望もきちんと受け入れ、病棟保育士は子どもを理解している専門性を活かし、一人では解決せずに、アドバイスをもらいながら行っていく (36)。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの病状についてなど、不安に思ったことは、看護師さんに確認し相談しながら (37) 関わっていくことを心掛けている。

表9 質問項目8「病棟で子どもと関わる上で大切なことや心掛けていることなどがあれば教えてください。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃの消毒など感染予防対策に重点をおき、配慮している。 ・家族支援として、行事に家族も参加できるよう工夫している。 ・医師や看護師との連携を大切にしなければならない。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌な思いをしていないかなど表情を読み、異年齢同士の関わりを通して皆で楽しみながら活動し、病棟保育士が子どもにとっての話し相手になれるように心掛けている。

持って行っていけるような支援・教育も今後必要となってくるだろう。

質問項目7「子どもたちと関わっていく中で、困難に思ったことや不安に感じたことなどがあれば教えてください。」に対する回答を表8に示した。この質問に対する回答から、子どもの生活をよりよいものにするために、病棟保育士は、医師や看護師、心理士と積極的に相談・情報共有していこうとしていることがわかる (表8 下線部33③④⑤⑥⑦)。そしてスタッフ間の連携を適切に行うことが今後の病棟保育士の課題とも言える (波線部35)。病気に対する知識不足への不安があることも病棟保育士の課題である (波線部32)。医療スタッフと適切に連携しながら乗り切っていくことが必要とされる分野である。また、この質問への

回答でも、下線部31にあるように、短期間での関係で子どもとの信頼関係を築くことの大切さについて指摘されていた。

質問項目8「病棟で子どもと関わる上で大切なことや心掛けていることなどがあれば教えてください。」に対する回答を表9に示した。大切にしていることとしてあげられたのは、安全への配慮、家族支援、スタッフとの連携、友だち関係への配慮、子どもの話し相手になること、であった。

質問項目9「病棟保育士にはどのような役割が求められていると考えますか。また医療機関に病棟保育士を導入した利点や欠点はどのようなことだとお考えですか。」に対する回答を表10に示した。病棟保育士を配置する利点としては、安心できる病院という口コミが広がり利用者が増える (表10

表10 質問項目9「病棟保育士にはどのような役割が求められていると考えますか。また医療機関に病棟保育士を導入した利点や欠点はどのようなことだとお考えですか。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・医療的に5人の病棟保育士で行っていることを宣伝しているので、「安心材料」として、ママ友に宣伝され、リピーターが増えている(38)こと。 ・可愛いポスターの製作を頼まれることや看護のイベントを盛り上げる役割(39)を担っていること。 ・迷子や病室に入れない子どもの面倒をみている(40)こと。 ・病棟保育士が導入されたことによって、人件費がかかる(41)こと。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・通常の保育園で行っている活動を病院でも看護師と協力し、行ってあげたい。 ・生まれてからずっと病院に入院している子どもと保育園に通っていて入院した子どもや保護者に対してどう関わっていくか(42)。特に後者は環境の変化における気持ちの受け止め方の援助が行っていきけるように配慮している。 ・月に一回は必ず製作活動を取り入れることで、子どもの成長や発達がみられるような保育(43)をしている。 ・子どもたちが退院後、社会生活へ馴染めないことがないよう(44)に、集団での食育活動を週一回行っていくなど、メリハリのある生活を心掛けている。

表11 質問項目10「プレイルームの設置についての利点や欠点」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・病室ではない空間であり、子どもたちのパラダイスの空間(45)となっている。 ・プレイルームで遊ぶために薬を飲んだり治療に前向きに取り組んだり、退院するための楽しみとしての利点がみられる。 ・歩く練習やお薬の練習など、リハビリが行われる場所としても使用されている。 ・病室が増えたかも知れない。 ・ぜんそくではしゃげない子どもが解放され、安静にできる空間が作れたかもしれない。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・病室よりも楽しく遊べる場所であり、居心地がよい場所となってほしい。

波線部③⑧)ということがあげられる。病棟保育士の役割のうち、保護者の安心につながる部分は、例えば入院児の看病を保護者がしている時間、保護者と一緒に来ている入院児のきょうだい(感染予防のため病室には入れないことが多い)の面倒を病棟保育士が見る(波線部④⑩)ことができる点がある。また、病棟保育士が病棟環境を子どもにとって魅力的なものに整えることで、病棟全体の雰囲気によりよいものとなるというよさもある(波線部③⑨)。さらに、病棟保育士は病気をみるのではなく、子どもの成長や発達全般をみる役割がある(波線部④⑩)ので、その点も保護者にとっては安心材料となるのであろう。

病棟保育士を配置する際の課題としてはまず人件費の問題(波線部④)が指摘された。病院運営費の問題については、上で指摘したが、病棟保育士の配置によるリピーター増加にともなう収入の増加も可能性としては考えられる。人件費支出との

バランスに関して、さらなる調査が必要だろう。その他の課題として、病棟保育の内容について言及された。課題として指摘されたものは主に病院の外との繋がりに関わる課題ということができよう。波線部④⑩にあるように、子どもたちの生育環境にはそれぞれ違いがあり、個に応じた対応をすると同時に、環境の違う子どもたち同士のかかわりに配慮して保育を行う必要があり、保育士の力量が問われる場面だと思われる。そして、波線部④⑩にあるように、退院後の子どもの生活を視野に入れた保育計画が必要となる。退院の時期は子どもによって異なるため、この点でも個に応じた対応・配慮が必要となる。

質問項目10「プレイルームの設置についての利点や欠点」に対する回答を表11に示した。病棟保育士配置による診療報酬加算のためには、プレイルームの設置が必須であるため、プレイルームは病棟保育の重要な要素となっている。「プレイルーム

表12 質問項目11「今後の医療現場において、病棟保育士に求められることは何だと思いますか。」に対する回答

病院	回答
X 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンが使い、<u>文章能力がある (46)</u> こと (考えていることや伝えたいことが文章として自然な形で的確に伝えられること)。 ・会話の中で、<u>子どもの思いや感情を理解し、医師や看護師にも伝えられる (47)</u> こと。 ・元気や勇気・根性があり、<u>前向きにものごとを考えられる (48)</u> ことが大切。 ・コミュニケーション能力が万能で、<u>ユーモアに溢れている (49)</u> こと。<u>医師に伝える (50)</u> ことができ、<u>敏感に環境に反応し、整える (51)</u> ことができること。また、<u>他者との連携を行っていく上で、専門性が発揮 (52)</u> できること。
Y 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・退院後の集団活動において、<u>社会でも通用できる子どもを育成していくことへの配慮 (53)</u> を行っていく必要がある。

ムは子どもたちにとってパラダイスの空間(下線部④⑤)」という言葉が示しているとおおり、子どもにとってプレイルームは子どもたちにとってなくてはならない場所となっているようである。保育士がこの空間をうまく活用することで、子どもにとっての病院での生活がよりよいものとなるであろう。

質問項目11「今後の医療現場において、病棟保育士に求められることは何だと思いますか。」に対する回答を表12に示した。ここでは、現場で働く病棟保育士が日常的に感じていることを聞き取ることができた。回答をまとめると病棟保育士に求められることは(1)専門性(波線部⑤②⑤③)、(2)前向きな態度(波線部④⑧④⑨)、(3)コミュニケーション力(波線部④⑥④⑦⑤⑩)、の3つだと思われる。特にコミュニケーション力については異業種の専門家(医師・看護師)に理解してもらえるような話し方をする事の大切さが指摘された。

Ⅳ まとめ

本研究では、病院現場で働く病棟保育士にインタビュー調査を行い、病棟保育士の目から見た病棟保育士の役割、利点や課題について考察した。

子どもの病院での生活をよりよいものにするための病棟保育士の役割について、インタビューで得られた回答は、(1)遊びを通した支援、(2)環境設定、(3)保護者・きょうだい支援、(4)スタッフとの連携、の4つに分類できる。家族とはなれて入院生活を送る子どもたちにとって、病棟保育士が子どもの好きな遊びを通して関わることは、子どもの不安の軽減に役立つと思われる。遊びを通した

かわりの中で、病棟保育士は、子どもの成長を全般的に見守ることができ、成長の様子を保護者に伝えることで、保護者の子育てへの不安を軽減することもできる。また、病院という安全・感染等に十分な配慮を要する環境を、安全・感染に配慮しながらも子どもが楽しんで生活できるよう環境設定するのは病棟保育士の大きな役割である。インタビューで訪れた病院では随所に病棟保育士による環境設定の工夫が見られた。そして、入院生活は保護者・きょうだいにとっても大変さともなうものである。保護者・きょうだいへの支援も病棟保育士の重要な役割である。スタッフとの連携については、子どもの病院での生活をよりよいものにするために欠かせない。子どもに関わるスタッフ同士がうまく連携できるよう努めることも病棟保育士の役割である、と病院現場の病棟保育士は感じていることがわかった。

病棟保育士の利点については、子どもや家族にとって安心材料になるということが挙げられた。医療スタッフではないためより身近に感じられる存在という利点があると思われる。今回の研究で、病棟保育士自身からその利点について多くを聞き出すことは難しかった。利点を明らかにするためには今後、医師や看護師、入院している子どもやその家族を対象に調査をする必要があるだろう。

病棟保育士の課題については、本研究で、実際に現場で働く上で直面している困難について聞き取ることができた。病棟保育士を配置する上では人件費の問題が課題となるが、これについては本インタビューからは詳細な聞き取りはできなかった。病棟保育士の力量を向上させるという点での

課題については、様々な要素を聞き取ることができた。回答を大きくまとめると (1)個に応じた対応, (2)病気の知識, (3)パソコンスキル, (4)スタッフ間の連携の4つに分類できる。個に応じた対応として、入院している子どもたちそれぞれの生育環境や病気の状態に配慮した関わりが必要とされる。そして環境の異なる子どもたちが集団として関わっていく際にも配慮を要する。保護者とのかわりにも同じことが言える。病院現場でも個に応じた対応ができるよう病棟保育士のスキル向上が課題である。また、病気の子どもと関わるといふ点で、病棟保育士にも病気の知識があったほうが自信を持って保育に携われるということもわかった。パソコンスキルの向上については、病院事務が電子化されている現在、病棟保育士にとっても必須なのと思われる。最後にスタッフ間の連携についてであるが、異業種である保育士・看護師・医師が関わる際に、互いの考えをうまく伝えるためのコミュニケーション力を身につけることが大切であることがわかった。「遊び」ひとつとってもその重要性についての理解は保育士と医師では大きく違うであろう。その違いを埋めていくようなコミュニケーション力が病棟保育士には必要とされる。

本研究では3つの病院を訪問し、病棟保育士8名へのインタビュー調査を行った。いずれの病院でも病棟保育士が活躍し子どもの入院生活の質向上に役立っていることを感じた。しかし、病棟保育士が配置されていない病院も数多くある。保育士よりも看護師の雇用を優先したいと言う、病棟保育を行っていない病院の関係者もいる。医療との連携や病院運営の視点からも病棟保育士の役割と子どもの入院環境の質の向上について考えていく必要があるだろう。

註

- 1) 京極恵・千田昌子「小児病棟での役割と活動の実際について」『近畿大学臨床心理センター紀要』第3号(2010年), 177頁
- 2) 同上178頁
- 3) 山下文雄「大学病院, 小児総合医療施設(小児病院)における病棟保母, 臨床心理士の現状と問題点」『平成3年度厚生労働省心身障害者研究「小

児慢性疾患のトータルに関する研究』(1991年), 334頁, 337頁

- 4) 京極恵・千田昌子「小児病棟での役割と活動の実際について」『近畿大学臨床心理センター紀要』第3号(2010年), 178頁
- 5) 鈴木裕子「病棟保育職の現状と課題」『東京家政大学研究紀要』第40集(2000年), 118頁
- 6) 同上
- 7) 宮津澄江・笹川拓也・入江慶太・神垣彬子「医療保育者養成の取り組みに関する現状と課題」『川崎医療短期大学紀要』第29号(2009年), 60頁
- 8) 京極恵・千田昌子「小児病棟での役割と活動の実際について」『近畿大学臨床心理センター紀要』第3号(2010年), 178頁
- 9) 末成智子・猪狩恵美子・高橋智「小児がん・難病等の幼児と病院内保育のニーズ: 病院内保育に関する保護者のニーズ調査の分析を中心に」『東京学芸大学紀要, 第1部門, 教育科学』第54号(2003年), 270頁
- 10) 帆足英一「病院における保育を巡る現状と課題」『小児看護』7月号(2009年), 1020-1023頁
- 11) 京極恵・千田昌子「小児病棟での役割と活動の実際について」『近畿大学臨床心理センター紀要』第3号(2010年), 179頁
- 12) 末成智子・猪狩恵美子・高橋智「小児がん・難病等の幼児と病院内保育のニーズ: 病院内保育に関する保護者のニーズ調査の分析を中心に」『東京学芸大学紀要, 第1部門, 教育科学』第54号(2003年), 269-298頁
- 13) 出射和美・前田美恵子・安本寿美江・猪木真紗美・板垣知恵子「病棟保育士導入の有用性についての検討—看護師と患者家族へのアンケート調査から—」『山口大学医学部付属病院看護部研究論文集』第82号(2006年), 26-29頁
- 14) キワニスドールとは木綿生地に綿をつめた人形で、子どもはそれに顔を書いたりしてオリジナルの人形を作ることができるものである。Z 病院では、入院中の子どもが人形に注射をする、おもちゃの手術室で治療をするなど、ごっこ遊びを通して子ども自身が受ける治療への不安を軽減することを目的として用いられていた。